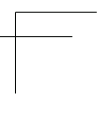
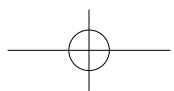
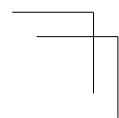
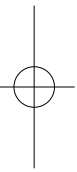
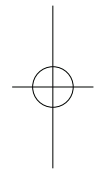
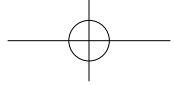
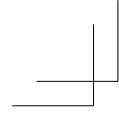


WHITE TIGER

玄天 第一卷

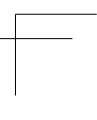
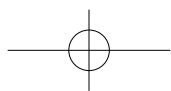
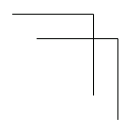
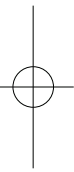
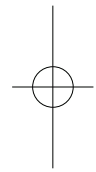
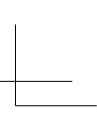
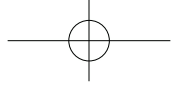
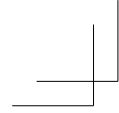
白虎

著 カイリー・チャン
訳 石川 ミカ
監訳 西沢 有里





マリアナ海溝の奥底
凍てつく暗い水
大なる黒蛇は
泥の中に眠る



第一章

「エマ、これが最後の警告よ。うちの幼稚園にスーツで来られないなら、減給よ」ミス・クオが高価な老眼鏡越しににらみつける。「ジーンズは禁止。もったきちんとした服装をしてちょうだい。覚えておくのよ」

私は何も答えなかった。オフィスを出て、チェンさんの家へ行きたいだけ。

「髪型もだめ。一緒に美容院へ行ってやらなくちゃいけないわね。髪はクシヤクシヤでお化粧もしてない。まったく、エマ、あなたの身なりときたら何もかも今一つなのよ。もう少しましに見えるように努力してちょうだい」

のどの奥までこみ上げてきた言葉を全部飲み込んだ。

「保護者から苦情が来ているの」ミス・クオは机

の上の書類をめくった。その顔は腕のいい美容整形外科医のおかげで四〇代前半に見えるが、手が実年齢を語っている。「あなたは子供達とのおしゃべりにかまけすぎて、ABCを十分に教えていないそうね」

「英語を覚えるにはおしゃべりが一番ですから」

「なるほど。でもABCを覚えさせてちょうだい。一年生の入学試験に合格するには、アルファベットをそろで言えて、単語をつづれなければいけないの。いいこと、あの子達はね、最高の学校に入るために猛勉強しにここに来ているのよ」

幼稚園児相手に入学試験をするような学校なんて最低だと思ったが、顔には出さない。

「どうなの？」

仕方がない。「ここはあなたの幼稚園ですから、ミス・クオ。もっとABCを教えるようにします」

「その態度がときどき鼻につくのよ、エマ」ますます怒らせてしまった。

「ああ、それから、お絵かき道具をむやみに使わないで。一年で一セット分の予算しかとっていないの。それなのに使いすぎよ」

腕時計をチラリと見た。「もういいですか？ 一時間以内にチェンさんの家に行かなければならないので」

「チェンさんの仕事はどんな具合なの？」

「個人指導の枠は全部埋まっています。チェンさんお一人で」

この言葉にミス・クオが反応した。「時間外指導はチェンさんのお宅だけ？」私はうなずいた。「でも、あなたの電話番号は随分大勢に渡したのよ。まさかそっちは面倒だから辞めてしまったなんて言わないわよね。あなたは午後一時まで働いて、たくさん稼がなくちゃいけないの。夜だらだと過ごしてはだめよ」

「皆さんが香港を出ていつて個人指導の枠があいたので、チェンさんがそこに入っただけです。私がシ

モーネを見られるように、何人かの保護者に交渉しましたようです。でも本当によかったわ。シモーネはこれまで教えた中で一番いい子ですから」

ミス・クオは私をじっと見つめた。「あなた、チェンさんの所で働くのは好き？」

「もちろん。とてもいい方です」

「もう少し稼ぐのはどう？」

「もう十分にいただいています、ミス・クオ」

ミス・クオは私の目をしっかりととらえた。「チェンさんの仕事の内容と家に入出入りして^でいる人の名前を覚えてくれたら、もっと稼げるわよ」

私はミス・クオを見つめ返した。

「あなたにとってもよくしてあげられるんだけど」

「結構です」

ミス・クオは頭を少し上げた。「私のために、やってくれるわよね、エマ」

「いいえ。私、辞めさせていただきます」

「辞めることは許さないわ。あなたはここにずっ

といふのよ」

「明日の朝、そこに辞表を置いておきます」ミス・クオは激怒のあまり顔をしかめた。だが私はその目をしつかりと見つめた。「辞めさせていただきます」「私ほどこい給料を払う人間は、香港にはいないわよ」

「かまいません」と突っぱねる。「何か見つけますから」

「辞めるなら二週間前に通告してもらわなければ。あと二週間は働いてもらいますからね」

「急にインフルエンザにかかったみたい」立ち上がる、振り向きもせず部屋を出た。

友人のエイプリルがオフィスの外でコンピュータに向かっていた。フィアンセのアンディがうしろでうろろしている。エイプリルはオーストラリア生まれの中国美人で、銀行でシステムプログラマーをしているが、ときどき幼稚園のコンピュータを見にくるのだ。柔和な優しい顔立ちで、鮮や

かな赤茶色に染めた髪を肩で切りそろえている。

「あらエイプリル、またね。急がないと、チェンさんの所に遅れちゃう」声をかけて急いで通りすぎた。

「土曜日、タイ・レストランに行くでしょう？」エイプリルの声が追いかけてくる。

「行く、灣仔ワンチャイでしょ」

細身で着こなしのよい中国人のアンディが、こりともせずにエイプリルの頭越しにこちらを見た。「僕は行けない。中国に行く必要があつてね。遅くまで出歩くなよ」

アンディの目つきが気にいらぬ。「あら、それは残念」がっかりしているように聞こえるといふほど。

「じゃあ、土曜日に」エイプリルは画面に向き直った。

地下鉄 MTRの車両の仕切りにもたれ、あれこれ考える。

またやってしまった。でもミス・クオのいじめにはもううんざり。いくら高い給料をもらっても割に合わない。海底トンネルの暗闇を、揺れながら通りすぎる車両に合わせるように頭を振った。チェンさんがしていることを教えろだなんて、いったいどういう神経をしているんだか。幼稚園経営以外の事業にも関心があるのは知っていた。ミス・クオは香港でも指折りのお金持ちで、「メリー・ウイドウ」、「社会福祉のゴッドマザー」と呼ばれている女性だ。でも個人指導先をスパイしろだなんて、はるかに度を超えている。

ため息が出た。この四年間にミス・クオからもらった高い給料と、個人指導先から受け取った高額の小切手とで貯金はかなりある。それでしばらくはやっていけるだろう。オーストラリアに戻って、田舎で平凡な生活を送る気にはなれなかった。まだ二八歳。焦って退屈な生活に落ちつく気はさらさらない。髪の毛を整えようとしたがうまくいかない。短い

茶色のポニーテールはいつものようにあちこちほつれてきてしまっている。でも誰も私のことなど気に留めていない。この車両にただ一人の、どうということのない西洋人。身長は約一六八センチと平均的で、少々太目。飾り気のない服に化粧気のない顔。肩まで届く地味な茶色い髪。特別な所など何もない。金鐘駅アモイに着き、ラッシュに紛れてプラットホームに降りた。地上行きのエスカレーターに乗り、ターミナルへと向かう。そこからピークのチェンさんの家までバスに乗る。駅を出たとたん、車の騒音と大気汚染が殴るように襲いかかってきた。旧正月が終わったばかりで二〇〇二年の午年が始まっていた。二月末の陽気は涼しかったが、そよ風は少し湿っていて、息苦しい夏がもうそこまで来ていることを感じさせる。

「それから、ダークキングはダーククイーンとベビープリンセスに、さよならのキスをしました」四

歳のシモーネはクリーム色のカーペットの上でレゴの人形を動かした。

「どうしてダークキングなの？」

「だってダークキングなんだもん。やあね、エマ」

シモーネがレゴを動かしながら前かがみになると、はちみつ色の髪が肩に垂れた。その透けるような肌と明るい茶色の瞳は、ヨーロッパ人の母親譲りだ。

「わるい人たちが来ました。そしてダーククイーンはこわくなってにげました」シモーネはクイーンの人形を走らせ、見るからに悪者とわかる別のブロックをぶつけた。クイーンが倒れる。シモーネは白いブロックを手にし、人形達の上を飛び回らせる。

「ホワイトタイガーがたすけに来ました。でもダーククイーンはもうしんでしまったあとでした。ダークキングが帰ってきて…」シモーネはダークキングの人形を元の場所に戻した。「でも、ダーククイーンがしんでしまったので、キングとプリンセスはいっしょにないで、ムギユってして、それでいつ

までもいつまでも仲よくくらそうねとやくそくしました」

「本当に悲しいお話ね、シモーネ。クイーンは戻してあげたら？」

シモーネは肩をすくめ、何か言いかけたが、ふと動きを止めた。そしてうつろな表情を浮かべたかと思うと、パッと顔を輝かせた。「パパが帰ってきた！」

玄関の外にある金属製の門の複雑な装置がぶつかりあい、カチャカチャと鍵の音がした。シモーネはサッと立ち上がるとリビングを駆けていった。「パパ！」

チェンさんが入ってきた。シモーネの父親は四十代半ばで、中国人にしては背が高く、一八〇センチを越えている。時代遅れの中国風の綿の上着とズボンは黒ずくめ。しなやかな身のこなしは、しっかりとした筋肉を感じさせる。髪はとても長く、ゆうに腰の下まであり、いつものように結び目からほつれ

て肩に垂れていた。それを気にもかけず、靴を脱ぎ
すてる。

チェンさんはシモーネを見ると体をかがめて片手
をさしのべた。シモーネが両手を上げて走り寄ると
片手でやすやすと抱き上げ、もう一方の手で持って
いた剣を壁のフックに素早くかけた。シモーネは小
さな腕で父親の首にかじりつき、大きな音を立てて
頬にキスをした。チェンさんは黒い目をキラキラさ
せながら微笑み返し、シモーネの肩越しに私を見て
うなずき、真面目な顔に戻った。

「ドナホウ先生」私は立ち上がってうなずき返し
た。中国人の雇い主にはいつも丁重に対応するよう
にしている。雇い主。今となつては唯一の。

「それで、何をしていたんだい？」

「我同エマ^{シゴト}…」シモーネが言いかけると、「英語で、
シモーネ」チェンさんが怒ったふりをする。シモー
ネはクスクス笑ってまた話しはじめた。

「エマとレゴであそんでるの。楽しいよ」

「それはよかった」チェンさんはシモーネをそつ
と下ろした。「さあ、ドナホウ先生と遊んでいなさ
い」そして背後のドアに向かって叫んだ。「モニカ！
フィリピン人家政婦のモニカがキッチンから顔を
のぞかせた。チェンさんに気づくとサッとドアを開
け、タオルで両手を拭きながら廊下に出てきた。背
が低く、まるまるとした中年女性で、優しい顔をし
ている。

「すみません、旦那様。お帰りとは知らなくて」
モニカはリビングのカーペットに散らばっているレ
ゴを見つけて言った。「散らかして、すみません、
旦那様。すぐに片づけます」

「気にしないでいい。それより、シャワーを浴び
ている間に何か麺類を用意しておいてくれ。河粉^{ホーファン}と
スープと菜心^{チョイサム}。少しでいい。またあとで出かけるか
もしれないから」そこまで言うとうと止まり、何か
に集中するような顔をした。「どうしてレオは下に
いるんだ？」

「車を洗っています。とても汚れていましたから」
「携帯に電話して、今すぐ戻るように言いなさい」
モニカはキツチンへと姿を消した。

チエンさんが振り向いた。「どのくらいいられま
すか、ドナホウ先生？」

「ご都合に合わせて、いつまでも、チエンさん」
私は打ちあけた。「今日の午後に幼稚園を辞めたの
で、明日は早く出なくてもいいんです」

「新しい仕事を見つけたんですか？　うちへはも
う来ていただけないと？」チエンさんは心配そうだ。

「行かないで、エマ！」シモーネが泣き叫んだ。

「行かないわ。キティ・クオの所で働くのが嫌に
なっただけなんです。何かほかの仕事を見つけるつ
もりです。ご心配なく、こちらは辞めませんから」

「よかった」シモーネはまたレゴで遊びはじめた。

「それで、どのくらいいいいんですか？」

チエンさんが優しく微笑んだ。「一五年くらいか
な。ここにフルタイムで来るのはいかがですか？」そ

して片手を上げた。「待って、答えないで。まずシ
ヤワーを浴びて、着替えさせてください。それから
お話ししましょう」そう言うと、自分の部屋へと大
股で廊下を歩いていった。

「ずっといられるの？」シモーネが嬉しそうに目
を丸くする。

「わからないわ、シモーネ。いろいろ考えなくち
やいけないもの」

シモーネの小さな顔が期待にはころんだ。「うん、
って言って、おねがい」

門と玄関が開き、チエンさんの運転手、レオが入
ってきた。レオは黒人のアメリカ人で、身長は二メ
ートル近くあり、筋肉でできた壁のような体つきを
している。醜いとしか言いような顔に、芸術的
なほど複雑な折れ方をした鼻の持ち主だが、その笑
顔は優しく、シモーネを溺愛していた。

「ハ―イ、レオ」シモーネがあいさつをする。

「やあ、シモーネ、エマ」レオは玄関で靴を脱ぎ

すて、リビングに顔を出した。「あの人はどこ？」

「シャワー中」私が答えると、レオはうなずいた。

シモーネがレゴを放り出して急に立ち上がる。「聞いて、レオ！」

レオは小さな茶色い目を輝かせてシモーネを見た。「何だい？」

「エマはズーっとしてくれるんだって」

レオは鋭く私を一瞥した。「本当に？」

「ううん、違うの」慌てて説明する。「フルタイムで働いてくれないかって頼まれただけ。でも、私も考えなくちゃいけないし」

レオはリビングに入ってきて、私達を見下ろした。

巨大な両腕を胸の前で組む。「実を言うと、エマ、フルタイムで来てくれるとありがたい。君はこれまでで一番いい先生だしな」

「どうもありがとう、レオ。すごく嬉しい」シモーネの希望に満ちた顔をチラリと見下ろした。「考えてみる」

チェンさんが濡れた髪をタオルで拭きながら裸足で廊下を歩いてきた。いつも家では信じられないほどみすばらしい格好だが、この晩も例外ではなかった。黒のTシャツは色あせてすり切れていたし、黒い綿のズボンは片方の膝の所がボロボロに破れて大きな穴があいている。チェンさんの目はほとんど黒に近い、珍しいほど濃い色だ。そして頬骨が高く、あごががっしりとした、中国南方特有の彫りの深い顔立ちをしている。チェンさんは髪からタオルを外して一方の肩にかけると、片手で長い髪をとかしてかきあげ、私の目をまっすぐ見つめて微笑んだ。

チェンさんはレオを見て顔をしかめた。「こっちへ。今すぐ」背を向けると、振り向きもせずに廊下を横切ってダイニングへと入っていく。レオはうなだれた坊主頭をコンコンとたたきながらチェンさんに続いた。

「レオはたいへんなことになった。パパはすごくおこるわよ」シモーネが囁く。

「どうして？ 車を洗っていただけなのに。運転手さんの仕事でしょ」

「あたしたちを二人だけにしちゃいけないことになってるの」シモーネは大真面目だ。「けがしちゃうかもしれないから」

「けが？ 誰のせい？」

シモーネは前かがみになって近寄ると囁いた。「わるい人たち」

何てこと。レオは運転手じゃない。ボディガードだったのだ。誘拐は頻繁にはないが、起きている。香港の裕福な家庭の子供は皆標的になる。当然、レオはボディガードだ。わかりきっている。家に私達だけを残していたことを、チェンさんがあんなに怒っていたのも無理はない。

シモーネが目を見開く。「だからパパはどこへでもけんをもっていくのよ。わるい人たちがいるから」
「剣？」シモーネは玄関ドアの隣のフックにかかっている剣を指した。私は驚きのあまりビクリとあ

とずさった。剣を手に取り回って、いったい何をしているのだろうか？ それに、いったいどうして今まであの剣に気づかなかったのだろう？ 六ヶ月の間パートタイムで働きに来ていたのに、雇い主が剣を持ち歩かなければならないのはなぜか、疑問にも思わなかった。

「どうしてパパは剣がいるの、シモーネ？ 映画の撮影所で働いているの？ それとも武術を教えているとか？」

「じゅつつていうか」シモーネは肩をすくめた。「おしごとなの、パパのおしごと」

突然、チェンさんがどうやって稼いでいるのか見当もつかないこと、そして明らかにものすごいお金持ちであることに気づいた。組織犯罪にかかわっている可能性もある。そういう人には見えないが、疑わずにはいられない。

「パパはどんなお仕事をしているの？」
シモーネが答える前にダイニングのドアが開き、

レオが出てきた。打ちひしがれて見る影もない。肩越しに親指でダイニングを指して言う。「君の番だよ、エマ。シモーネはモニカの所に行ってお風呂に入れてもらったら？」

「エマと入りたい！」

「パパとフルタイムで働くことについてお話ししなくちゃいけないの、覚えてる？」

「ああ、そうだった」シモーネはダイニングへと私を押しやった。「お話ししに行つて」

チェンさんは長い髪をうしろで束ね、麺をすすりながら手紙を確認していた。

「お座りください、ドナホウ先生」河粉麺を脇によける。

「召しあがってください。すぐお腹がすいてらっしゃるみたい」

チェンさんは笑い、目尻にしわを寄せた。「いえいえ、麺のほうは待てますから。フルタイムの件は、

いかがですか？」

「どのくらいお給料をいただけるのか、何時間働くことになるのか、うかがっていません。教えてくださいださらないと決められません」

「おっしゃるとおりです。週に六日間、住み込みでフルタイムでは？ 日曜は休み。モニカとレオも休みです。一ヶ月にあと二、三日は休暇をさしあげることもできるでしょう。で、月五〇〇〇USドル」

思わずたじろいだ。「五〇〇〇USドルですか？」

チェンさんはうなずいた。「割のいい条件だと思いますよ。部屋と食事も付けます。受けていただけますか？」

ベビーシッターに年間六万USドル？ まじまじと相手を見た。本気らしい。ここで半年働いてきたが、この人は取引に関しては完全に信頼できる相手だ。だが聞かなくてはいけないことがあと一つある。「チェンさん」早口で質問を言い終えた。「何か違法なことにかかわっているんですか？」

チエンさんが見つめ返す。その表情からは何も読みとれない。

香港汚職取締委員会

「つまり、銃を手にしたICACに連行される可能性はあるんですか？」

チエンさんはさつきよりも少し長く見つめていたが、ハッと我に返った。「違法なことには何一つかわっていません。ICACに関心をもたれるはずはない。事業はすべて完全に合法です。シモーネの幸福を危うくするようなことは決してしません」

「それじゃあ、どうしてボディガードが必要なんですか？」

しばらく無言で見つめてから答える。「レオはシモーネを守っているんです」

「追われているんですか？」

とても力強いまなざし。「私には力がある。そのために標的になってしまう。心配いりません。うちで働いてくださるのなら、決して危険な目にはあわせませんよ」

「だから剣を持ち歩いているんですか？ 警察にとがめられませんか？」

「街中では絶対に持ち歩きません。外に出るときは車の中に置いておきます」

ダイニングテーブルから身を乗り出した。「チエンさんは、どんなお仕事をされているんですか？」

黒い瞳がまっすぐに私をとらえた。「しばらく働いてくださったらお話しします。あなたがここにずっといると決心されたら」

「決心しないとお思いですか？」

その質問はさらりとかわされた。「引き受けていただけですか、ドナホウ先生？」

私はためらった。だが年に六万USドルもらえる上に、生徒はかわいらしい女の子、そして雇い主はハンサムで謎めいた男。断る理由があるだろうか。

「はい」

チエンさんは上機嫌で温かく微笑んだ。「いつから始められますか？」

「明日からでも。でも、まずは借りている部屋の問題を片づけなくては。ああ、それに」大事なことを思い出した。「ミス・クオに、辞める二週間前に通告しなければいけなかったんです」

チェンさんはとりあわなかった。「キティ・クオのことは知っていますよ。そもそもあの人があなたの電話番号をくれたんですから。そっちはうまくやっておきます。それから、ルームメートの方とも話をつけましょう。よろしければ明日にでも引越せますよ。住み込みはできますよね？」

「もちろんです」

チェンさんが立ち上がって手をさし出したので握手をした。驚くほど冷たい手で、指には固いたこがある。「レオが明日、引越しを手伝ってくれるでしょう」そしてもう一言。「我が家へようこそ」

シモーネにおやすみを言いにくいこうと廊下を歩きながら、やれやれと頭を振った。またやってしまった。一日に二度の即断即決。私にとっても、さすが

にそれは新記録だった。

第二章

混雑したMT地下鉄RとKC九広東鉄Rを乗りついで沙田シャティンの家に帰るまで一時間以上かかった。マンションの下に並ぶ店でテイクアウトを買う。家に着くと小さな四人がけのテーブルに座り、ビニール袋から発泡スチロールの箱を取り出した。

「ルイズ、ここに座って。ニュースよ」

ルイズがちっばけなキッチンキッチンの入口から顔を出した。「お湯が沸くまで待って」

「いいわ」ファーストフード店でもらったプラスチック製のフォークで、敷き詰められたご飯の上の豚の切り身を突つつく。

ルイズがコーヒー入りのマグカップを手にキッ

チンから出てきて、向かいに座った。先端を立たせた短いブロンドの下で青い瞳が輝いている。同じオーストラリア人で身長もほとんど変わらないが、似ているのはここまで。ルイーズは痩せ型でブロンド、骨ばっついてそばかすだらけ。私はぶよぶよで丸っこくて、容姿端麗にはほど遠い。皆ルイーズには目を留めるけど私のことは無視。それでいいのだけだ。

ルイーズはテイクアウトの箱を指した。「私の
は？」

「飢え死にしたら」そして切り返した。「私のお茶
は？」

「干からびて死んだら」反撃された。「どうした
の？」

「チェンさんの所に引越す。フルタイムで…」

言い終えることはできなかった。ルイーズが飛び上がり、歓喜の声を上げたからだ。「やったね、エマ！」

私はルイーズを見つめた。

「ピークに住んでるあのセクシーな男？ 中国人の男やもめ？ 本物のお金持ちの？ すごい玉の輿！」

怒りがこみ上げ、ため息をつく。「フルタイム、住み込みのベビーシッターだってば」

「そうよね、そうでしょうよ」ルイーズは思わせぶりに言った。「どういう意味かはわかってるって」

「そのまんまよ、ルイーズ。ただのベビーシッター」

ルイーズは腰を下ろした。「まったくエマったら、もっとまじな仕事はできないの？ すごい学位をもってるのよ、あんたは。銀行かどこかの働き口を探さないよ」

「あんたみたいに？」

「そう、私みたいに。銀行では山ほど男に会えるよ。ヨーロッパからのトレーダーが大勢いるし。本当にイカしてるんだから。ミス・クオはどうする

の?」

「もう幼稚園は辞めたの」

「ベビーシッターよりずっといい仕事につけるでしょ、エマ。私なんて一ヶ月で二万近く稼いでるよ」

「こっちは一ヶ月に五〇〇〇USドル。香港ドルだと四万近く」ルイーズが口をあぐりと開けた。

「明日引越すつもり」

ルイーズは首を横に振った。「わかったわ、全部話して。あんたと彼だけで暮らすの? 少しは望みがあるんでしょ?」

「私、ボディーガード、家政婦のモニカ、それからもちろんシモーネ。彼の娘」

「ボディーガード? その人格好い?」

「まったくもう、ルイーズ、あんたってそれしか考えていないの? レオはでかい黒人のアメリカ人。素敵な人だけど、若い女の子には興味ないんじゃない」

ルイーズは眉をしかめた。「ちょっと待った。レ

オ、って言った? でかいアメリカ人? 黒人?」

「知ってるの?」

「直接は知らないけど、ラスト・フレーで見かけたことがある。有名人よ。皆知ってる」

「いったいフレーで何してたの?」強く問いただした。「あそこじゃ男は見つからないわ。誰も女なんて興味ないんだから」

ルイーズは肩をすくめた。「ときどきね、ちょっと出されない所で静かに飲むのもいいものよ。いつ行っても目の保養になるし」

「それは楽しそう。次行くときは教えて」

「これからも一緒に出かけられるよね?」ルイーズは心配そうだった。「ほら、明日の晩、エイプリルと一緒にタイ料理食べに行くことになっているし。これからも出かけられるんでしょ?」

「チェンさんが禁止するとは思わないけど」私も心配になった。「そんなことしようとしたらはずきり言ってやる」

「その言葉、信じてる」ルイーズは椅子の背にもたれた。「新しいルームメートが見つかるまでは、家賃の半分を負担してもらわなくちゃ。でもその給料なら問題ないよね」

「あんたが損しないようにするから」そしてつけ加えた。「いずれにしても、あの人もあんたのことは考えるって言ってくれていたし」

「そうこなくちゃ」ルイーズはふてくされたが、すぐに顔を輝かせた。「やったよね、エマ。玉の輿」

「なにもないってば」

「そう、そうよね。あんたときたら、あそこで働き始めてから、長髪の素敵な彼の話ばかりしてたもの」

私はため息をついた。「それはそうだけど。でも雇い主だもの。そんなことにはならない。私だってプロのはしくれよ」

「まったく、あんたは冷血人間なこと」
「皆そう言うけど、やめてほしいわ」

翌朝、レオと並んで車の助手席に座った。レオはチェンさんの巨大な黒ベンツでピークまで荷物を運んでくれた。

「チェンさんの所ではどれくらい働いているの？」
何か話そうと思って尋ねた。

「六年ほどだ」とレオ。「でも、その前にチェン夫人の仕事をしていた」

「ずっとボディガードだったの？」

レオはチラリと私を見て、また道に目を戻した。

「ほかの仕事もした」

「どんな？」

レオはため息をついた。しばらくして話す決心がついたらしい。「海軍にしばらくいたことがある。用心棒もやったが、仕事がきつすぎて気にいらなかった。たまたまボディガードの仕事についたって感じかな」

「チェンさんがルイーズによくしてくれて嬉しか

った。でも今年分の家賃を全部払うことはなかったのに」

「俺達が最低限できることをしたまでさ。君を雇って、こんなに慌てて引越させちまったからな」

「俺達？ まさか、あなたとチェンさんって？」

レオは道から私へと視線を移し、また道に目を戻してニヤリとした。「とんでもない」

疑うように見つめているとレオの笑みが広がった。

「絶対に違う」道から目をそらさずに強調する。「チェンさんは違う」そしてまたチラリとこちらを見て、道に目を戻した。「チェンさんじゃない」

「わかった、わかった」そういうことね。チェンさんとは無関係。

レオは頭を振りながらまだニヤニヤしている。そして故意に話題を変えた。「君はどのくらい英語の先生をしているんだ？」

「四年くらい。香港に来たら、たまたまそうなっ

ちやっただって感じかな」意識してレオを真似た。「すごく儲かるし、仕事は簡単。拘束時間もそんなに長くない」

レオはうなずいた。「ここにいるほとんどの人がそうじゃないのか？ 着いてから、いつの間にか何かしている。出身は？」

「オーストラリア」

「ああ。いい所だってね」

「そんな言葉じゃ言い表せない」複雑な想いだっただ。「わからないでしょうね。もちろん行ったことなんてないでしょ」

「ない」

「チェンさんは何の仕事をしているの？」レオは無言で道を見つめた。「レオ、チェンさんは何の仕事をしているの？」

レオは道に目を向けたままニヤリとした。「それはあの人に聞いてくれ。俺は単なる運転手さ」

「そうね、そして私はシバの女王」

チエンさんをものにしたらすぐに聞いてやる。ジョン・チエン氏をものにするのをしばらく思い描いて楽しんだ。だがすぐに気を引き締めた。プロに徹しなさい、エマ。

レオの動きが止まり、目がうつろになった。運転は続けているが道は見えていないようだ。

「大丈夫、レオ？」

片手を上げて私を制したが、目はまだ焦点が合っていない。それからハッと我に返り、すぐに携帯電話用のハンズフリーのイヤホンを耳につつこんだ。

電話が鳴り、レオはためらうことなくボタンを押して話した。「もうすぐトンネルに入るところで、九龍市にいます。あと三〇分か四〇分くらいでしょう。それからなら使えますよ。それでいいですか？ 急ぎましょうか？」レオは通話を聞きながらうなずき、「わかりました」と電話を切った。

「チエンさん、車がいるって？」

レオがこちらをチラリと見た。「そうだ。でも待

ってくれる。それほど急ぎじゃない」

「じゃあ、車は一台しかないの？」

「ああ、一台しか必要ない。四人しかいないんだから。あの人と俺と、シモーネとモニカ。ほとんどのスタッフは自力で通ってくる。俺が運転するのは、シモーネを乗せてレッスンに行くときと、モニカをマーケットに連れていくときだけだ」レオは道から目をそらし、真面目な顔になった。「荷物を運んだら、シモーネの日課を一つずつチェックしていこう。外でのレッスンもあるし、家でもかなりやつてる。それに遅刻しないようにするのが君の役目だ」

「それから、いろいろなものがどこにあるかも教えてもらわなくちゃ。あと、鍵も一揃いちょうだい」レオはうなずいた。「もちろん。そいつを忘れてたよ。何か見落としてたら言ってくれ。いいね？」

「了解、レオ」

チエンさんのマンションはピークのかなり上にあ

った。ピークタワーよりもずっと高い。木々が生い茂る小道のつきあたりの門がサッと開き、警備員が手を振って招き入れた。

マンションは一一階建てで、一つの階に広い住戸が二戸ずつ入っている。新しくはなく、明るい茶色のタイルは大気汚染のためにくすんだ灰色に変わり、湿気のせいで所々カビが生えている。香港の雲はときおりとても低くまで垂れ込め、ピークをすっぽりと水蒸気で覆い、夏も冬も、何もかもぐっしょり湿らせてしまうのだ。

レオは車を停め、チェン家に向かうエレベーターに荷物を運ぶのを手伝ってくれた。

「この家はいったい何平米あるの？」玄関で尋ねた。

「広さは十分」

ドアはありふれた木製のものだが、香港風にその前に大きな鉄の門がついている。レオは玄関脇の壁のキーパッドにセキュリティゲートの暗証番号を入

力し、外側に開いた。そしてデッドボルト錠を外し、ドアを押さえて私を入れてくれた。

玄関で靴を脱ぐと、レオは私を連れて主廊下を進み右に曲がった。最初のドアは通りすぎ、左側の二番目のドアを開ける。「ここが君の部屋だ」

中に入り、立ちつくした。それは一部屋ではなく、続き部屋だった。広々とした長方形の部屋が二つに区切られている。入ってすぐの部屋は居室で、座り心地のよさそうな革製のソファ、小さなテレビ、そしてパソコンの載った机があった。奥はきれいに整えられたモダンなダブルベッドのある寝室で、両側にドアがある。

レオは運んできた箱を下ろし、ドアを一つ開けた。

「こっちはシモーネの部屋に続いている」そしてドアを閉め、もう一つのドアへ向かった。「君のバスルーム」

「自分のバスルームをもらえるってこと？」

「ああ。いるものがあつたら言ってくれ」

辺りを見回す。「ここって最高。こんなにいい部屋は期待してなかった」一枚ガラスの窓からは、香港湾とその向こうの九龍の高層ビルが見下ろせた。

「いい眺め」

「案内するよ。それから残りの荷物を取りに行こう」

「ありがとう」

レオは家の端から端まで続く廊下に私を連れ出し、私の部屋と同じ側にあるドアを順に指さして言った。「チェンさんの寝室。俺の部屋。シモーネの部屋。君の部屋」私はうなずいた。「俺達の部屋は皆同じ大きさだけど、チェンさんのは少し広い」そして反対側のドアを開けた。「こっちは音楽室」部屋にはピアノが一台、胡弓という、ギターに似た中国の楽器が載ったテーブルが一つ、そして隅に黒いエレキギターがあった。「音楽室の隣がテレビの部屋。サラウンド音響がすごい。ほかに誰もいなければ使つかまわない」

レオは私の部屋の隣のドアで立ち止まり、ためらった。

「そこには何があるの？」

「ここに住むからには知っておいたほうがいいだろう。さあ見て」レオはドアを開けた。

初めはダンススタジオだと思った。柔らかな白いマットが床全体を覆っている。一方の壁は床から天井まで鏡になっていた。もう一方の壁に目を移すと、武術用の恐ろしい武器が床に置かれたラックの上にずらりと並び、壁のフックにもかかっていた。剣、こん棒、ヌンチャク、ナイフ、斧など、ありとあらゆる武器がある。

私はフラフラと武器に近づいた。そしてラックから剣を取ろうと腰をかがめたが、レオが手首に手をかけて止めた。「どれにも触っちゃだめだ。これは皆とても鋭いからけがをしやすい。ドアが閉まっていたらここへは入らないこと。さもないと大けがをすることもある」レオは繰り返した。「立ち入り禁止」。

わかった？」

私はうなずいた。「何でも言うとおりにする」

レオは私の肘をつかんで優しく外に連れ出し、うしろ手にドアを閉めた。そして廊下のつきあたりを指して言った。「チェンさんの所にはときどき…」

ぴったりの言葉を探すかのように口ごもる。「…いろいろな人が、教えを受けに来ることがあるんだ。そういう人が、廊下のつきあたりの、その二部屋に泊まる。その人達に話しかけようとしないうこと。ここには…その、学びに来ているわけで、友達を作りに来ているわけではないんだ。だからその人達には話しかけないこと。わかった？」

私は肩をすくめた。「はいはい」

レオが上からにらみつけた。「こっちは本気なんだよ」

「その人達には絶対に話しかけません」

「よろしい」

レオは廊下を戻り、主廊下へと向かった。「シー

ツ類のクローゼットと女性用トイレはその角」左側のドアを指さして説明する。その向かいには、クリーム色の対のソファが置かれ、香港島の南側の絶景が望める一枚ガラスの窓がある大きなリビングだ。レオはさらに続けた。「チェンさんの…」またためらう。

「書斎」

開けっ放しのドアをのぞいた。「被災地ね」レオは小さな笑い声をもらった。「散らかったオフィスはいくつも見てきたけど、レオ、この部屋は優勝間違いなしね」

「君がそう言ってたって話しておくよ。隣がダイニング、それからキッチン」そしてキッチンへ行き、カウンターで野菜を切っているモニカの横を通りすぎた。「モニカの部屋がこの奥にある。その隣が倉庫」

倉庫に入って見回した。ほとんどは布で覆われた棒のようだ。隅に、ゆうに私の腰まである巨大なガラスの壺が置いてある。中には大きなオリーブの

ような黒い玉がたくさん詰まっていて、複雑な金属製の封が施されていた。好奇心をそそられ、よく見てみようと腰をかがめた。

「それに触るな！」レオが私の腕をつかんで壺から引き離れた。「近くにも行つてはだめだ。開けたら、君は死んでしまうかもしれない」そして腕を離れた。「絶対にその近くに行つてはいけない」

「毒があるなら、いったい何でここに置いておくの？ シモーネが入り込むかもしれないでしょ」

「あの子をよくわかつている。今では君もわかつたはずだ」そして再び告げる。「立ち入り禁止」

「それ何？ ドライフルーツみたいだけど」

「もう十分見ただろう」レオは倉庫を出るとドアを閉めた。「残りの荷物を運んでこよう。それから君さえよければシモーネのスケジュールを確認しよう。すごく忙しいんだ、うちのお嬢様は」

「了解」

部屋に荷物の箱を下ろすと、レオは私を連れてダ

イニングに行った。そこには一二人がけのローズウッド製の円卓とサイドテーブルがあった。壁には水墨画が何枚か飾つてある。

ダイニングを出ていったレオは、色とりどりの書類がぎっしり詰まった大きなファイルを持ってきた。それをテーブルの上にドサツと置く。「今後は君がこれを担当してくれるとはありがたい。このスケジュールの山には誰だつて頭がおかしくなる」

レオはファイルを開き、一枚ずつ書類を渡した。「中国語の授業。バイオリン。ピアノ」そして一枚をよけた。「歌はやめた。君がフルタイムでいるから、英語も必要なし、と」そしてピンク色の書類を取り上げ、無表情な顔でじつと見た。「バレエ。くそっ」

「何なの？」

レオは書類をテーブルに置いて坊主頭を片手でなでまわしていたが、最後にピシヤリとテーブルの上をたたいた。「これから言うことをあまり怖がらな

いでほしいんだ、エマ」

「怖がる？」

「バレエは中環で習っている。君は俺がボディガードだと見抜いたよな。いいか、俺が君達を車で連れていつて待つ。俺かチェンさんが一緒になければ、あの子をどこにも連れていつてはいけない。それはあの子が誰の娘かつてことが理由だ」

「誰の娘なの？」

レオはかすかに微笑んだ。「あの子を公共の交通機関に乗せてはいけない。俺かチェンさんが必ず車で連れていく。それから、俺達のどちらかが、あの子を守るためにいつも一緒にいなければならない。変に思うだろうけど、あの子の安全が最優先なんだ」

「誰に追われているの？」

レオは書類を私に押しつけた。「以上。ああ」突然思い出したようにつけ加える。「土曜の朝にはポニーに乗り^{ローウ}に羅湖に行く。何か質問は？」

テーブルの上に山積みになった書類をまじまじと

見た。「お給料がいつて思ったけど、今じゃ足りない気がする」

「心配するなつて。俺達のどちらかが一緒にいれば、絶対安全さ」

「どういふことか教えてつたら、レオ」

「今はまず落ち着くことだ。仕事のこつをつかんで。あとでもつと詳しく話すよ」

「約束する？」

レオは微笑んだ。「約束するさ。チェンさんはあの子に『武術』^{ウーシュー}も教えている。稽古があるときはそう言われる。そしたらあの子を稽古場に連れていつて、三〇分したら迎えに戻る。簡単だろ」

「ウーシューつて？」

「武術さ。カンフーのこと。あの子に見せてもらうといい。実に決まつてるぜ」

「子供が親から教わるのは普通のことなんでしょ？」

「一家のしきたりなら絶対やらなくてはいけない。

俺も教えてもらっている」

「チェンさんはお父様から習ったの？」

「そいつは面白い」とレオ。「でも、それはないはずだ」

「レオ？」ドアをノックした。

「どうぞ、エマ」

レオは机に向かい、コンピューターでウェブサイトを見ていた。

私は本の山を持ち上げた。「誰かがこれを私の部屋の机に置いていったの」

「へえ」レオは椅子に座ったままぐるりと回って私と向きあった。「きつと、前のベビーシッターが置いていったんだろう。欲しければとっておいていいよ」

「この本すごく高そう」私は中国の神々を図解した大型本を指さした。

レオは肩をすくめた。「とっておけよ」

私も肩をすくめた。「わかった。どうせ中国神話には興味あるし。友達のエイプリルがお祭りで何かするときには一緒に行くの。本当に面白い」

レオが興味を示した。「中国の神様に興味があるのか？」

「ええ。いい本が揃っているわね。前に図書館で借りたのも何冊があるし」

レオはコンピューターに向き直った。「それなら絶対とっておけよ。役に立つから」

部屋に戻って本を机に置き、ジョン・チェンについてインターネットで検索してみたら、とてもありふれた名前で百万件以上のヒットがあった。「ピーク、ブラック通り一番地」と住所を入力して絞り込むと、中国系のタブロイド紙の記事を翻訳した英字新聞の記事を見つけた。

どうやらチェンさんが住む建物は呪われているという噂が広まっているらしい。最上階の周りを飛んでいる龍の姿を大勢の人が見かけっているという。記

者が地元の超自然現象専門家に意見を求めたところ、建物が呪われているせいだと答えた者が三人、建物が並はずれて幸運に恵まれているからだと言えた者が二人、いやそれは建物が建設されたときに亡くなった龍の精だと答えた者が一人いた。

どこまで本当なんだか。次に中国の神々を解説した大型本を開いてみた。それはなかなかの良書で、冒頭で、中国神話は儒教の教えと道教の錬金術、そして仏教哲学を寄せ集めたものであると解説していた。

本を置いて荷ほどきを再開し、最後の荷物を箱から出して片づけた。香港に四年もいるのにたいしたものを持つていない。これまで暮らしてきた所はどこも収納スペースが少なかった。でも人生の風向きがよくなってきたようだ。なにしろ、魅力に満ちあふれた雇い主と、一緒にいると楽しいその娘と暮らすのだから。

第三章

その日の午後遅く、ドアがボタンと閉まり、シモーネが叫んだ。「エマいる？」

玄関に出ていくと、シモーネとチェンさんが揃って靴を脱いでいた。チェンさんは剣を手にしておらず、それは玄関脇にかけられたままだった。シモーネは小さな靴を丁寧に靴箱に入れると父親の靴もしまった。チェンさんは嬉しそうに見守り、私を見て微笑んだ。正面から見つめられ、ほんの一瞬、その素敵な黒い瞳に見とれる。すると突進してきたシモーネに跳びつかれ、ひっくり返りそうになった。

「こんにちは、エマ！」シモーネが叫ぶ。「もうずっとここにいてくれるんでしょう？」

かがんで抱き上げ、シモーネと一日中一緒に過ごせる喜びをかみしめた。「そうよ。もうずっと一緒に」シモーネは小さな腕を私の首に回し、頬にキスを

した。私の額に自分の額を押しつけて真顔で見つめる。「よかった」それから身をよじって私の腕をすり抜けると、手をつないできた。「ぜんぶ見た？」

「見たわ、シモーネ。レオが案内してくれたの」

シモーネは口をとがらせた。「おなかすいた」

「夕ご飯はすぐだよ、シモーネ。我慢なさい」

玄関口で楽しそうに見ていたチェンさんが言った。

「レオから食事の話は聞きましたか、ドナホウ先生？」

「いいえ」

「夕食時に私がいるときは、家族全員で食事をするんです。その日にしたことをいろいろと話せるのでね。よろしいですか？」

「もちろんです。ときどきは外出できますか？」

今夜は友人と食事をする事になっているんです。

土曜日の夜はたいてい出かけるので」

「当然です。あなたの私生活を過度に侵害するような真似はしたくありませんからね。よその方と食

事をしたいのなら、もちろんお出かけください」

ルイーズは珍しく私に引きあわせる相手を連れてこなかった。ルイーズときたら、香港中のありとあらゆるフリーの男性を知っているようで、絶えずお膳立てしてくれるのだ。ときにはうまくいって数ヶ月間気軽な恋を楽しむこともあったが、うまくいかなくても気ままに過ごした。どちらでもかまわなかった。いずれにせよ、香港で長い間関係が続けることなどできない。常に人が出入り^{では}しているのだから。

「ミス・クオに会いに行かなければだめよ」エイプリルが言う。「不満があつたのなら話してくれればよかったのに。ミス・クオはあなたが辞めたので、おかんむりよ」

「そりゃそうでしょうよ」私はビールをすすった。

「私なしでは半分は生徒を失うもの」

ルイーズの青い目が輝いた。「あんな嫌な女の所に戻っちゃだめだよ、エマ。もっといい仕事ができ

るんだから」

エイプリルは気を悪くした。「ひどいわ。ミス・クオはいい人よ。とてもお金持ちだし。敬うべきよ」

「あなたのフィアンセがあの子の親戚だからそう言うだけじゃない」ルイーズが言い返す。「幼稚園のコンピューターを直したって、お金もくれないんだよ」

「で、アンディは元気？」私は話題を変えようとした。

「結婚式の準備は全部済んだわ。シドニーの私の両親の所で式を挙げるの」エイプリルは見るからに嬉しそうだ。「楽しみだわ。家族もとても喜んでくれるの。アンディの家はとても裕福でね、すごい名家なのよ」

「それはそれは」ルイーズが小声でつぶやく。

「式はいつ？」興味があるふりを装ったが、内心ではルイーズと同感だった。アンディはいつも完璧なまでに礼儀正しかったが、どうしても好きになれ

ない。

「来月よ」エイプリルは胸を張って満足そうに微笑んだ。「オーストラリアで式の日取りを決めるのは簡単だったわ。その日はとても縁起がいいのよ」

「それはそれは」ルイーズがまたつぶやく。

エイプリルには聞こえなかったようだ。「明日はお寺に行って…」英語の言葉を探して口ごもる。「ご先祖様のご加護をいただくつもり」

「一緒に行って見せてもらっていい？」と私。

「いいわよ。あまり見るものはないけど。位牌だけ。ご先祖様とかね」

「お寺で待ち合わせでいい？」

エイプリルはうなずくと、身を乗り出して指先でテーブルをトントンとたたいた。「エマ、ミス・クオの所に戻るべきだわ。幼稚園にはあなたが必要だそうよ。易占いをしてもらって。ミス・クオと一緒にいるべきだって言われるから」

「もう新しい仕事があるの」